

## 議事録

件名	泉大津市図書館整備検討委員会			第1回						
日時	平成30年7月23日(月曜日) 開始18:00~ 終了:									
場所	職員会館3階集会室									
出席者 (敬称略)	委員	委員長	中川 幾郎	帝塚山大学名誉教授						
		委員	前田 茂樹	大阪工業大学准教授						
		委員	花井 裕一郎	一般社団法人日本カルチャーデザイン研究所理事長						
		委員	木村 有香	泉大津市校長会代表						
		委員	源 真由美	泉大津市園長所長会代表						
		委員	三井 保夫	泉大津市立図書館長						
		委員	藤原 容子	泉大津市社会教育委員						
事務局	泉大津市		富田教育長、丸山教育部長、櫻井教育部理事、鍋谷参事、大塚課長補佐							
	コンサルタント	ランドブレイン株式会社(LB)	西村、月山(記録)							
		株式会社ローカルファースト研究所	関							
議題	1. 開会 2. 委員委嘱 3. 委員紹介 4. 委員長及び職務代理者の選出 5. 議事 (1) 委員会の目的(資料1) (2) 検討スケジュールについて (3) 泉大津市図書館整備の方向性について (4) 意見交換 6. その他 • 次回の日程について 7. 閉会									
<b>1. 開会</b> 事務局: (富田教育長より挨拶)										
<b>2. 委員委嘱</b> (富田教育長より中川委員へ委嘱状を)										
<b>3. 委員紹介</b> (各委員の自己紹介)										
<b>4. 委員長及び職務代理者の選出</b> (事務局より中川委員を委員長として推挙、中川委員承諾) (中川委員長より前田委員を職務代理者として推挙、前田委員承諾)										
<b>5. 議事</b> 委員長: 本日は傍聴者がいらっしゃるので入室いただく。										

## (1) 委員会の目的

事務局：（委員会の目的について説明（資料1））

全體：（質問・意見無し）

## (2) 検討スケジュールについて

L B：（検討スケジュールについて説明（資料2））

花井委員：ヒアリング調査と市民アンケート調査の対象者はどのように設定しているのか。

L B：関係団体へのヒアリング調査は市内のNPO等の団体。

市民アンケートの対象はまだ決まっていないが、今日、ご意見をいただければと思う。

前田委員：市民アンケート調査の対象者をどのように設定するかは重要。

8月から市民アンケートを実施することをよろしいか。

L B：配布については、8月を予定している。

関：今は市役所と調整しているが、小学生アンケートについては学校をいくつか抽出し、ゲーム感覚で意見把握したいと考えている。市民アンケート調査は、16歳以上で1,000人を無作為抽出する。年代別人口構成に沿った形で1,000人を抽出し、郵送型アンケートを実施する。

小学生アンケートは小学校ごとにシールやボードを使ってゲーム的に意見を抽出し、「見える化」して整理する。アンケートとは別に、駅前にて大学生と通勤者に対して、直接型ヒアリングを200サンプルずつ実施する。市民アンケートは年齢と居住地でのクロス分析を想定している。

中川委員長：8万人弱の人口で1,000サンプルは、信憑性のあるデータを回収できるのか。

前田委員：市民アンケート調査では、若者のサンプルを一定数確保できるような抽出方法が取れればよい。

事務局：検討させていただく。市民アンケートと並行して市民ワークショップの募集をしている。ワークショップでは20名ほどの中学生以上の市民を募集する。

中川委員長：アンケート調査票の内容についてご意見したいことはあるか。

前田委員：13～16歳の子ども・少年たちには、質問の聞き方で結果が変わることもある。選択式か記述式かで、想定していない回答もでてくるかもしれない。学校の中で集めるとなれば書きにくいこともあるかもしれない。アンケートの形式次第では、子どもたちの細かい意見も把握できると思うので、委員長のおっしゃるように、アンケート内容について知りたい。

中川委員長：アンケート調査の内容について意見を出した方が良いか。

事務局：会議のスケジュールにもよるが、委員の皆様にはメール・郵送で案をご確認いただきたいと思う。

中川委員長：委員の中には図書館に精通した方もいらっしゃるので確認いただくことも必要。

中川委員長：小学生アンケートの聞き方と16歳以上の市民アンケートの聞き方には工夫が必要。小学生アンケートは、学校図書館に関して聞くのか、市立図書館と連携した上で意見を聞くのかで設問が変わってくる。

アンケートするためのアンケートでは意味がない。設問の内容には認知度、使用度、信頼度の3つがあるが、グラデーションが分かる設問を設計してほしい。利用者の要求を把握するだけのアンケートは意味がない。高級志向でたくさんの司書が常駐して365日使え

て、といった現実味の無い答えが出るのでは意味がないので、意見を深堀りできる形で、政策が浮き彫りになるようなアンケートを考えていただければと思う。

中川委員長：検討スケジュールについてはタイトなスケジュールだが、頑張っていただきたい。

### (3) 泉大津市図書館整備の方向性について

関：（泉大津市図書館整備の方向性について説明（資料3））

前田委員：大和市文化創造拠点シリウス（以下、シリウス）は運営が縦割りではないとの説明があつたが、それを実現したポイントは何なのか。

富山市立図書館の椅子が500脚あるというのは施設の特徴だと思う。パリやニューヨークなどの公園では、椅子などが移動可能で、公共空間を自分の居心地の良いように変えることができる。椅子が移動可能であるメリットとデメリットを教えてほしい。

関：シリウスはDBO型の民間提案型の施設である。整備計画は行政が作成し、設計から建設・運営までを民間が実施しており、官民両方の視点で運営ができている。運営については、地域企業が指定管理者制度で実施している。

中川委員長：「市民主体の運営会社」と説明があったが、具体的な団体名があったほうがイメージしやすい。「指定管理した団体」とひとくくりにしても千差万別であるから、記号化するのはよくない。

関：富山市立図書館は設計時点での配置を決めているため、それほど椅子を動かせないが、窓際には長いカウンターと椅子がある。4フロアあり、市民の方が好みの場所を選んで利用している。

藤原委員：大阪市立図書館や和泉市立図書館などを利用したことがあるが、和泉市立図書館はスーパーの上層階に入っており、学生は自習室を利用するため整理券を求めて並んでいる。今回の整備では自習室の設置は想定しているのか。

事務局：現在の図書館も自習室としての利用の要望が多く、日曜日は会議室を開放して自習室として開放している。新図書館も自習室を整備して開放したいと考えている。

藤原委員：和泉市立図書館の自習室は、約20人のキャパシティで、テーブルごとにライトがついており評判がよい。図書館は、居心地がよく利便性の高い場所にあると嬉しいという声も聴いている。

三井委員：紹介いただいた先進事例は駅前に立地しているのか。駅前と駅前ではない場所の場合とで図書館の役割、特徴はあるのか。

関：千代田図書館、シリウスは駅前ではない。武蔵野プレイスは駅前。富山市立図書館は中心市街地に立地しており公共交通を利用して来館する利用者も多い。

花井委員：郷土資料のアーカイブとしてデータベースとあるが、どこまでの範囲をアーカイブするのか。新図書館の機能の検討に際しては、現状の図書館はどうなっているのか、現況分析の結果を出してもらいたい。個人的な要望だが、館長を公募するのであれば早めに募集した方がよい。運営体制の方向性は委員会の中で決めていったほうがよい。

木村委員：以前テレビで観たが、2段ベッドのようなスペースがあって寝そべって利用できる図書館

があった。本が好きではない子どもも利用できるような工夫があるとよい。

源委員： 説明で理解できない点が多かったので勉強していきたい。

おはなし室はよいと思うが、子どもと親が一緒になって絵本を読むのであれば、どの程度の居室の広さを想定しているのか。

中川委員長：議論の追加で明らかにしていただきたい点があるので申し上げる。

アーカイブの話があったが、文書館ではなく、あくまでも図書館ということであるならば、郷土資料と行政資料の取り扱いは分けた方が良い。同じ位置づけで扱うとコンセプトがおかしくなる。行政資料（各部署が作成する資料）を置き、図書館に来れば役所のデータが見られるという位置づけにすればよい。

学校図書館との関係の記述が見られなかつたがどこにあるのか。

関：本日の資料の中には記載はない。事務局と打合せのうえ、第2回委員会で議論するように準備を進めている。

事務局：現在、学校同士のネットワークシステムは繋がっているが、市立図書館と学校図書館のシステムは繋がっていない。管理システム上のネットワークは必要と考えており、今年12月に市立図書館と学校がネットワークで繋がる予定である。

現在、市立図書館の職員は、館長と再任用の職員が1名、嘱託司書が2名、その他1名、OB職員が1名であり、窓口業務を委託している。学校司書は各校1名おり、週15時間体制の有償ボランティアで勤務していただいている。その体制自体も問題だと考えている。市として「読書量日本一」を掲げているなかで、新図書館の移設は最重要だと考えているが、それだけで「読書量日本一」は達成できない。市内中のネットワークの構築が必要だと考えている。そのひとつが市立図書館と学校図書館とのネットワークである。システムはもちろん、学校図書館の充実、市立図書館から学校図書館へどのように本を流していくかが大切であると考えている。また、社会教育施設等にも、施設に関連する本を置けたらと思っている。

人的ネットワークも大切だと考えている。現在も図書館長を中心に、司書や市域団体とのネットワーク会議を実施しており、これを継続・発展させていきたいと考えている。

中川委員長：再確認すると、市立図書館と学校図書館とのネットワークは未完成だが繋いでいく方向性であり、「市の図書館は人的にも施設的にもバックアップできる機能が必要である」ことについての議論が必要ということか。

有償ボランティアとの連携という点について、施策的に意識した方がよいのか。

事務局：学校図書室の地域への開放を進めている。現在、小学校8校のうち2校を開放しており、今年度もあと1校の開放を目指し、話し合いを進めている。これは継続していきたい。

中川委員長：新しいものができるのに合わせて、一緒に力を合わせて頑張っていけるのがよいと思う。幼稚0～5歳のところで、研修会場の中に一基あるようなブックスタート事業はやっていないのか。

事務局：現在も行っており、保健センターの職員が回っている。

中川委員長：図書館主導で実施しているのか。

事務局：図書館で予算を取って連携して進めている。

中川委員長：館長の仕事は大変重いのではないか。

三井委員：正直、それなりに重い。30年前の図書館は、学校へ本を持って行っていたが、運営方法

が変わる中で、人手も必要になり、現在は学校側が図書館に来てもらっている。本来は図書館サービスとして学校へ赴いた方がよいと感じている。

源委員：幼稚園でも図書館の絵本を学級ごとに借りている。人数に対して何冊、と借りており子どもたちも喜んでいる。毎週金曜日に借りて月曜日に返す。取りに行くのは負担にならない。

中川委員長：社会教育施設への蔵書などは、図書館が管理するイメージか。長期貸出や期間貸出を各施設で実施し、各施設が独自で書籍を購入しても図書館が管理するのか。

事務局：現在の開架書庫は8万冊、全体の蔵書は24万冊ある。今、眠っている本を有効に貸し出していきたいと思っている。

中川委員長：配置検討の際に議題になると思うが、書庫をどこに配置するかが問題になる。別のフロアに確保することにならないか。移転先が広いと安心していると危険である。

事務局：例えば、商業施設に開架書庫、既存図書館は閉架書庫にすることもひとつの考え方だと思う。閉架図書を市民が要求した場合には、閉架書庫が離れている場合は時間が掛かってしまうが、逆に閲覧スペースは広く確保できる。ただ、狭くなるが同じフロアに閉架図書もある程度置いておくメリットもあると思うため現時点では決めかねている。委員の皆様にはご意見いただきたい。

花井委員：どの本を開架図書とするのかといったルールづくりが必要である。よい機会なので、あまりにもいらないものは府立図書館に任せ、所有しない判断もある。何でもかんでも捨てる事はないが、ルールを早めに決める必要がある。旧図書館をアーカイブにするチャレンジはありえると思う。動かなくてはならないが、アーカイブもしなければならない、どうするかというルールの目的を明確にして動かしていけばよいと思う。

中川委員長：資料3-5の管理運営計画について、もう一度説明していただきたい。

事務局：直営か指定管理かは市としては決めかねている。

前田委員：整備手法に関してDB方式の提案をなされているが、整備手法のメリット・デメリットは世の中で議論されている。今回は改修のみであるため、構造部材（ハコモノ）が大きくなる事はないが、設計者と施行者を分けるのが健全である。専門でない方は、PPP=DB方式という捉え方をする恐れがある。設計と建設を分ける従来型の発注形態も大枠では民間活力を導入していることになるので、選択肢にあげて議論した方がよいと思う。今回のプロジェクトに関しては、まずは設計者を選びデザインを決めてから、入札形式で施工者を決定する方がよいのではないかと思う。

花井委員：運営の立場からというと、運営者をどうするかに力を入れていただきたい。館長を早く決め、準備に時間が無い中でどう経営していくかの検討が必要である。館長の仕事は数年前とは違っており、司書の働き方も変わってきている。運営者がどう入っていくのか、例えば設計者と運営者が組んでプロポーザルに参加することもある。キーになるのは、誰が運営するか。行政が自前でするのであればどういう体制ですか、重要施策であれば積極的に決めていってほしい。

中川委員長：資料3-5はコンサルタント側の提案ではあるが、仮定の議論をしていく必要がある。管理運営計画、整備手法については検討した方がよい。フロアだけではなく、運営についても議論をするべきである。

併せて確認であるが、開館5年間の図書館長公募は自治体の中核人材の獲得の話である。

これは同時がよいのか、別に議論すべきであるのか。

三井委員：図書館に何年か勤務していた人が指定管理者企業に入り館長になっているなど、経験を何年か積んだあとで館長に就任しているらしい。

中川委員長：現地調査して人材を獲得しているということか。その人材は、次の人材を育てる能力はあるのか。指定管理の期間が過ぎた場合どうなるのか。

花井委員：指定管理とは関係なく良い館長、悪い館長はいる。経営理念に注視するのかしないのか。私自身は本の文化を守るためにには、地域で運営組織を育てていくべきだと考えている。

中川委員長：山中湖畔の図書館もそのコンセプトではなかったか。その土地に入るなら死ぬまでやってくれ、という。

花井委員：群馬県太田市では、看板的には市が運営しているが、美術館はスパイナルという会社が協力体制で経営している。図書館は行政が運営している。バックアップ体制で、一緒に図書館を経営している例もある。全て、指定管理か直営かではなく、いろいろな組織体を作ることも考えられる。

中川委員長：指定管理者制度にこだわらないのであれば部分委託は有効。館長の職務まで含めて外部に任せるのであれば指定管理となる。

中川委員長：指定管理ならば、地元を理解し、地元の住民・ボランティア団体と協働でき、地域に定着できる人材が必要であり、世代交代しながら次の人才を育てていける仕組みをもっている経営体である必要がある。指定管理が望ましいのか、直営が望ましいのかは切り離して議論する必要がある。直営も批判はある。司書が挨拶しないといった文句も聞く。

中川委員長：専門人材を内部で確保できない場合、指定管理で民間に頼ることもある。この場合、指定管理の方がコストは高くなる。

関：指定管理のほうが高い。指定管理の方がサービスの質が高いので、公設公営よりもコストがかかる。シリウスは大和未来（図書館流通センター、サントリーパブリシティサービス、小学館集英社プロダクション、明日香、ボーネルンド、横浜ビルシステムの6社）という共同企業体を組成して運営している。

中川委員長：色々な組み合わせがあり、指定管理も千差万別である。

中川委員長：民営化するのはコストダウンを狙うというはあるのか。

事務局：泉大津市が平成13年度に財政全国ワースト1となったとき、社会教育施設の職員を全てOB職員に入れ替え、現在も運営している。財政効果は見込めないのが現時点での考え方であるが、新しい図書館のあり方を中心に検討していきたい。

中川委員長：運営主体の議論は置いておいて、まずはどのような機能を盛り込むべきかを議論した方がよい。

木村委員：子ども達に本をたくさん読む機会を与えたい。一番子どもが本を読む機会が多いのは、教室や幼稚園の学級文庫だと思うが、置いてある本は固定化されている。新しい図書館の機能として様々な本が各学校・学級を回るシステムを構築できれば、新しい本に触れる機会が増えると思う。

中川委員長：学級文庫の入れ替えを頻繁にするとなると、学校図書館の司書の役割・負担が大きくなるのではないか。

事務局：現在は有償ボランティアなので、そのままであれば厳しい。その位置付けをはっきりさせたい。閉架図書を閉架したままにするのではなく、学校図書館や教室に持っていくなど、そこまでのシステムを検討していかなくてはならない。

三井委員：小学校8校を順番に回るシステムをつくれば数年はもつ。そこに新しい本を追加していくのもひとつの手法である。

中川委員長：中間の総括としては、大筋の方向性は確認できたかと思う。

明確になって良かった点は、学校図書館とのネットワークを意識した施設であること、社会教育施設との連携を意識した中央図書館機能を持つこと、ボランティアとの連携を意識した拠点施設であること。

資料3-2の議論であるが、住民の理念に供し、能動的に学習したい人をバックアップするため、どんな司書のイメージができるのか。そのために現在の司書をどのようにスキルアップしてもらうのか、外部調達するのかという意見が出てくると思う。これについては次回議論を深めてもらえばと思う。

地元の産業やサラリーマンのニーズに対応した蔵書をといった意見があったが、図書館は2通りの役割があると考えている。安らぎと魂の充実の場所であるとともに、攻撃的な知識を手に入れる、ビジネスの知識装備を与えてくれる場所、いわゆる戦う図書館と安らぎ図書館である。泉大津の産業をバックアップする図書館を意識すればよいかと思う。

外国の図書に関しては、市内に勤めている外国人の方の子ども向けに、現地の絵本などを揃えなくてはならない。従来のオールラウンドパッケージ型の図書館ではなく、泉大津市版の戦う図書館について話合ってもらえばと思う。例えば働き盛りの方が多いのであれば、そのサラリーマンをバックアップするにはどうすればいいのかなど、社会に対応した図書館とは何か、など。少し立体的な議論が次回できればと思う。

PFIや指定管理などの整備手法は先にする。機能をどれだけ充実させるかという議論をすれば決まってくるのではないかと思う。

前田委員：外国の絵本の話を聞いて、市民アンケート調査を実施することだが、国籍の違う方へのアンケートもできればと思う。何らかのチャンネルを使って、ニーズを把握できればと思う。社会問題に対応できる図書館は素晴らしいと思う。翻訳等は大変かと思うが、日本人だけではなく外国人にも実施していただければ幅が広がると思う。

中川委員長：委員長に選出していただき、出過ぎた真似をしないでおこうと思いながら出過ぎてしましますみません。

図書館はただの貸しもの屋か、博物館はただの見世物屋か、文化ホールはただの公設演芸場か、公民館はただの語り場か、全部暇と金と体力と家族に恵まれた人ばかりが得をする。そういう声の大きな人に対応しているとその街は死ぬのでは。

何を考えなければならないかというと、声の小さな方の立場を考えること。その立場から出ていったのが移動図書館であり、文化ホールもアウトリーチする時代で、能動的な図書館像を描いていかないといけない。泉大津市の市民レベルは高いので、市民レベルに合った図書館をつくり、駅前から元気にしていくというイメージを持てればと思う。

## 6. その他

### ・次回の日程について

中川委員長：行政側の都合もあるだろうし、委員全員が出席するのは難しいのであれば、出られない委員には事前に意見聴聞し当日配布する形でよいのではないか。

事務局：調整して改めて連絡する。

## 7. 閉会

事務局：（丸山教育部長より挨拶）

以上